

---

# 鎧神慨装 カイザリオン

不良品

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鎧神慨装 カイザリオン

### 【Nコード】

N3252J

### 【作者名】

不良品

### 【あらすじ】

夜剣 廻。高校2年の一少年。彼のもとに突如として現れた一体の魔人。それは『鎧神慨装』と呼ばれる、神のような存在だった。

## 降臨（前書き）

無謀にも連載挑戦。

## 降臨

この次元には幾重の可能性と世界、歴史によって作られている。そこにはIfが存在し、いくつもの分岐点より派生した世界がある。次元を跳躍し、あらゆる事柄を凝縮した存在、鎧神慨装。この物語はその鎧神慨装から繰り広げられる、物語・・・。

朝。 煩い小鳥のさえずりと、カーテンの隙間から漏れ出る目を焼くような日差しによって、少年は起きる。といっても時刻はまだ午前4時。健康的な老人の起きる時刻。高校2年生なのに寝るのは9時半（夜の、である）、10時まで起きるなどもつての外、という少年。今時の小学生でも、そんな時間に寝ない。

ベッドから起き、頭をかく。枕は足の位置にあり、寝たときは正反対の向きになっていたのだと、その時彼は気がついた。寝像の悪さは誰に似たのか、と他人事のように考える少年。

その名を夜剣<sup>やつるぎ</sup> 廻<sup>かい</sup>。この物語の一応の主人公である。だが、主人公と言っても、根暗でメガネでチビで生意気で・・・と、万人より好かれる好少年ではない。自称やる気なしのリアリスト。

さて、こんなに朝早くより何をするかと言えば読書である。インターネットなど、彼はしない。音楽、ファッション、テレビなど彼には無用のもの。ただ、本を読むのが彼の趣味なのだ。友人たちは面白げのない人生と言うが、本人曰く、

「至高の時間」

だそうで、何者も彼の読書を邪魔はできない。

そうこう説明している間に時刻は7時。廻は朝食をとり、顔を洗い始めている。小説ではありがちなひとり暮らしだが、別段特別な理由はない。ただ、両親から高校の通学のために離れて暮らしているに過ぎない。

一通り準備をしたら部屋を出る。マンションの一室、4階から1階まで階段を猛スピードで駆け降り、マンション横の自転車に跨り、ペダルに足をかける。そして、街に繰り出す。

県立水瀬高校。それが廻の通う高校だ。生徒数は700人。都会とまでは無いが、そこそこ人口のある三上崎市。県内一、二を争う進学校があるこの街に来る生徒も少なくはない。廻は後期試験でなんとか転がり込んだ。僥倖、僥倖。と、当時は喜んでいた。（理由としては県内最大級の図書数を誇るから）

校舎に入り、彼は自分の教室、2年3組に入る。そして、自分の席に座り本を広げ、ようとして本がぼつたくられる。視線をずらすと、自分より若干背の高い女子生徒、ナツキ・エリクセンが立っていた。所謂幼馴染（腐れ縁ともいう）だ。

「あんたねえ、いつまでそんなんでいるのよ」

呆れたように彼女は言う。彼にとっては迷惑以外の何物でもない。

「エリクセン、僕にとにかく言うのはやめてくれ。僕と君は単なるクラスメイトなんだから」

彼の言葉に、彼女は俯き、トボトボ自分の席に帰っていく。そこに女子が寄ってきて雑談が始まると、彼女は何事もなかったかのように会話に入って行った。

そう、何事もないのだ。

虚無の感情が廻の中に明滅する。こんな日常のなかでも、廻の存在に関係なく世界は回る。果たして自分に存在の意味があるのか、と彼は感じていた。何事にも満たされず、他者との交流を避け、孤独に生きる。

今日も世界は彼なしに動いていく、かのように思われた。

だが、世界はそれを赦さない。廻を生け贄に物語は急転していく。

5月13日。突如、全世界において地震が発生した。あり得ない規模の大地震は三上崎市においても発生した。夜の日本では、寝起きの人々があわてて外へと繰り出していた。それは夜剣廻も例外ではない。彼は冷めた目で状況を判断し、しかし人の流れに任せるように歩いていた。揺れはもう収まっていた。だが、何かがおかしい。そして。

突然、空より光が走る。落雷のような、だが大きな柱のようなものが、三上崎の山を消滅させた。空の光によって斬られた雲より、巨大なナニカが降ってきた。

生命体と思わしきフォルム。金に輝くその体は天使や神を想像させる。だが、誰の目にもそれは悪魔でしかなかった。全長12メートルほどの悪魔は口らしきものを開けると、再び光を放つ。それは廻のいる方向にやってきて。

遮られた。

次元が歪み、その歪みの中に光は消えた。迸るスパーク。鳴り響く唸り。警戒する悪魔。歪みは広がり、一体の魔人が現れた。全長10メートル。黒と黄色で構成された体。生命体を思わせるものの、どこか機械的な体。悪魔のように禍々しく映る大きな角。光りなき眼球。

「なんだって言うんだ、これは・・・!!」

廻は混乱していた。およそ彼には似つかない表情。そんな彼の脳裏

に響く声。

『汝は選ばれた。刻は満ちた。万象を司りし要素は今、崩壊し、この宇宙、そして全ての次元世界に終末が近づいている』

「なん、だ・・・お、前は・・・！」

脳裏に響く声と共に来る頭痛。それに耐えながら彼は言った。

『我が名はカイザリオン。何者にも囚われぬ、次元の管理者、鎧神慨装。そして、汝の剣となり、盾となるう』

気づくと彼は見たことのない空間に居た。だが、直感的にここがどこかわかった。あの、鎧神慨装の中だと。情報が彼の頭をよぎる。膨大な情報。その中から、あの天使の情報を見つける。

『ウルゴリエル。次元世界の破壊者、ヴァーウルの僕』

ちくしょう。何かわからないがやるしかない。廻は叫ぶ。

「行け、カイザリオン！」

『了解した。我が主よ』

黒い巨体は光る天使に駆ける。両腕より、粒子ビーム状の刃が現れる。廻は、カイザリオンはそれを振り上げ、天使を切り裂く。血のような緑の液体を撒き散らし、天使・・・ウルゴリエルはその手に備わった爪でカイザリオンを貫く。

貫かれた場所は次元の歪みができていて、カイザリオンにダメージは無かった。

「トドメだ、ギャザッシュカノン！！」

ビームの刃は消え、カイザリオンは後退する。両の手を合わせ仁王立ちする。スパーク。その後、手を振り上げ、ウルゴリエルを捉える。

直上の光線が一本、天使の体を貫く。天使は肉体を溶かし、絶叫して果てた。

後には静寂の街と一体の鎧神慨装が残った。



## 降臨（後書き）

カイゼルブレード・・・カイザリオンの両腕に備わる、粒子ビーム状の近接武装。両腕より分離し、手に持って剣としても使用可能。ギャザッシユカノン・・・両手より発生させる、高次元エネルギー光線。現状のカイザリオンの最強武器だが、カイザリオンの消耗も激しく、連射は不可能。

## ナツキの想い（前書き）

短いです。

## ナツキの想い

私、ナツキ・エリクセンは夜剣廻に恋をしている。いや、これでは語弊がある。私は彼を愛している。きっかけは忘れた。幼稚園から今まで、ずっと一緒だった。彼が中学の時に周りと距離を置き始めるまで、私たちは仲の良い友達だった。時は私と彼の間に溝を作ったけれど、私の想いは強まるばかりだった。今、この時も。

5月14日。廻が学校を休んだ。誰もが廻のいない日常を過ごす。そもそも廻が元々いないように彼の話などしない。教師でさえも。寂しい。仕方がないけれど、寂しい。だから、せめて私だけでも彼を思い続けなければならない。

それは私の使命のように。けれど、それははっきりした意思。誰のものでもない私だけの。

放課後。私は彼の住むマンションに行く。四階の407号室。そこが廻の居場所。けれど、私は向き合う勇気がなくて。

逃げ出した。きっかけなしに私は前に進めない。

私は弱いから。

迫り来る運命を私はまだ知らない。

## ナツキの想い（後書き）

鎧神慨装・・・単独での次元転移を可能とする、機体群の総称。とは言うものの、鎧神慨装自体が未確認の存在、オーバーテクノロジーであるため、実質カイザリオンの通称である。ちなみに「慨」とは大いなる意思の意味である。

カイザリオン・・・形式ナンバー      TO + 。材質、エネルギー、開発者全てが不明の機体。機体自体に意思があるが、それがAIかは不明。単独での次元転移可能。主な武装はカイゼルブレード、ギャザッシュカノン。搭乗者は夜剣廻。

狂う「僕」

5月14日早朝。起きると僕は部屋にいた。昨夜のことは今でも覚えていいる。普段は見ないテレビをつける。昨夜の全世界自身は不思議なことに被害は出なかった。

ここ三上崎以外は。

あの後、どうしたかは知らないが、僕はここに居て、山も消滅している。しかし、外に出て見ても、特別警戒もされていない。何故か。

『それは次元の干渉であろう』

脳裏に響く奴、カイザリオン。鎧神慨装とかいう奴。昨夜は奴とリンクして、脳に情報と言う情報が厭と言うほど流れ込んだ。

「お前の言う、大いなる意思か」

『左様。次元に干渉せし不穏分子又はその被害を元に戻す、ということだ。もっともそれも今ではあまり働いていないがな』

取り敢えず、状況をまとめよう。

僕はこの鎧神慨装に「搭乗」し、天使を殺した。天使は次元破壊者の僕であり、この次元を破壊しようとした。僕はどうやら、選ばれた（カイザリオンの言う大いなる意思に）。どうやら僕の役目はこいつに乗ることらしい。曰く、鎧神慨装と言っても、所詮ロボット。操縦者なしには満足に動けないらしい。確かにこんな兵器がヒトなしに動いたら、この世界のバランスは崩壊だ。詳しいことはまだ分からないが、

「今日は休むか・・・」

取り敢えず、今は眠りたい。

ところが、だ。

『すまぬが主よ。この次元に飛来する物体を感知した』

僕は起きざるをえない。カイザリオンの次元転移により、僕の体は世界を超え、次元を超えた。莫大な情報にあてられて、僕もおかしくなったのか。いや、カイザリオンと体を共有しているのか。

空間の中で魔人は浮遊する。すると空間に切れ目ができて、中より異物が出てくる。

『破壊者の僕、合金の体を持つもの、ケツアルゴス』

蛇にも似た頭部をもつ機械の化け物。それを見ても僕は何とも思わない。麻痺している、思考が。頭が。僕は腕を動かす。リンクするように巨人もそれに合わせて。

駆けだす。機械の化け物に向かって。両手を突き出し。カイゼルブレードを起動させる。

ヴウウウウウ・・・

唸る刃をその頭部に叩きつける。緑の鮮血。悲鳴。冷酷に僕は奴の口を両手で力強く開いた。そして、それを裂く。

がああああぎやああああああ・・・！！

怪物の、絶叫。それを見つめる、赤き瞳。顔を血から庇うように腕で覆う。僕はただ、それを見る。

次元を超える怪物たちを誰が統べるのか。

『統治者、ヴァーウル。その目的は次元の統一。その正体は不明』

「奴を倒せば・・・？」

肯定の意を返すカイザリオン。

「柄じゃない。けど、やってやるさ」

そう言くと、カイザリオンは廻を元の次元に帰した。

気がつくと、廻は夕闇に染まり始めた空をマンションの部屋から見ていた。ふと、視線を落とし、階下を見る。

彼女だ。

赤茶がかった短い髪を風に揺らし、マンションに立つ、幼馴染。  
ナツキ・エリクソン。

僕はたぶん、彼女が好きなのだろう。

だから、僕は彼女を遠ざけたいのだ。

矛盾した考え。されど、彼はそれを貫く。それは贖罪。

中学入学直前。彼とナツキの間にあったこと。彼女も、誰も知らない、彼だけの記憶。

「俺はナツキを殺したんだ・・・」

その時、既に運命は狂い始めていたのかもしれない。

## 狂う「僕」（後書き）

ウルゴリエル・・・形式ナンバーXXX-1233。ヴァーウルたち次元破壊者の使う量産機。天使と思われる外観。武装は口内に装備された加速粒子砲。

ケツアルゴス・・・形式ナンバーXXX-1245。量産機。偵察・潜伏用の機体で光学迷彩等の装備を持つ。戦闘能力は皆無。



## 春のある日、

春。中学入学を目前とした、肌寒い朝。僕は彼女と公園に居た。僕より、少し背の高い、赤茶の髪を肩に揺らし、僕に微笑む彼女。それを受け流す僕。

ひょんなことから、ある山（今では消えた三上崎山）に二人で行った。確か彼女がこの街を一望したい、と言ったのだ。それぐらいなら、いいだろう、と僕は思った。

僕が自転車をこぎ、彼女が荷台に座る。何かの青春映画か、と思いながらも、僕は幸せだった。

山の頂上。一望できる街は小さく感じた。僕の家は街の中心から離れている。水瀬高校は歩いて2時間はかかる、そんなところに僕の家はある。

彼女が言った。

「普段広いと思う世界も、ちっけなものだね。でも、そんな中にも私たちはひとりひとり意思を持って暮らしている。今を生きようとしている。それって、素晴らしいことよね」

彼女は、たぶん、この日常が大好きで。愛おしくて。僕にはそれが喜ばしく感じられる。

「ね、キスしよっか」

唐突な、彼女の言葉。僕は固まる。

沈黙。その後、ゆっくりと動く僕。縮まる彼女との距離。そして・  
・。

事件は帰り道。僕の後ろに乗っていた彼女があるものを見つけたのだ。洞窟。幼い冒険心と好奇心が僕らの歩を進める。引きつけられるように。体は奥へと向かっていく。何かが導くように、何かを追うように。奥への道には、謎の文様があった。文字にも似たそれ

を不思議に思いながらも、僕らの足は止まらない。

1時間は、歩いただろうか。光が先から零れる。僕たちは走った。走った先に。

いたのは……。

### 鎧神慨装。

そう、今、思い出した。何故、忘れていた。僕は一度、鎧神慨装を見ていたのだ。カイザリオンとは違う、鎧神慨装を。

スパークと共に、跳躍してきたそれは、僕らに紅く光る瞳……僕には血走っているように見えたのを、僕らに向けて。

ナツキが倒れた。

僕は彼女を呆然と見る。そして、よぎる数々の思い出。

山の頂上、誰も見ていない二人だけの世界で、キスする二つの影……。

世界が歪む。その瞬間、僕の世界はぼくを中心に崩壊していった。崩壊した世界には、僕と奴。

『その痛みを忘れるな』

響く声。

『過ちを、犯すな』

『彼女を失くしても、君は使命を果たせ』

『さもなくば、君自身が君の倒すべき敵となる』

『忘れるな、そして、刻め。己の運命を』

気づいた時には洞窟は無くても。僕もナツキも生きていて。でも、僕は彼女を殺してしまったのだと、思いこみ、彼女を自宅に送って、それから、僕は。

誰も寄せ付けないことを決意した。何よりも大切な彼女を傷つけないために。

永久に続く、螺旋に少年は閉じ込められる。その先にあるのは、絶望への誘い……。

## 春のある日、（後書き）

夜剣 廻・・・主人公。高校2年生。17歳。身長は160?に満たない。趣味は読書。友人は皆無であり、孤独を貫き通している。カイザリオンの搭乗者にして、物語の鍵。今後、彼のたどる運命はいかなるものなのか・・・。

## もう一機の鎧神慨装

放課後。僕はさっさと家に帰りたかった。連日の戦闘は誰にも知られることなく、過ぎ去っていく。勿論疲れないわけがない。気だるい。だから、さっさと帰って次の戦いに備えたい。だというのに……。

彼女は僕を仁王立ちして通せんぼするのだ。彼女とは、勿論ナツキ・エリクソンだ。勝気な顔して僕を見る。

「今日は逃がさないんだから」

今まで逃げてきた、ツケか。その目は獲物を狩る猛禽類の目だ。あきらめる僕。いつだって彼女は僕に勝つのだ。

「……何の用だ」

「あんたさ……何か隠してない？」

彼女の射抜くような目。

「ないよ……僕には……」

「嘘ね。わかるわ」

「何がわかるって言うんだ。僕のことを……」

「わかるわよ。だって、ずっと……」

「異なる歴史、異なる過程を経ても、変わらぬものか。これも宿命か……」

僕とナツキのすぐそばに一人の男。黒髪に黒コート。サングラスで目は覆われていた。

「夜剣廻。見せてみる、その決意を」

歪む空間。

「貴様だけが、鎧神慨装を使えるわけではないことを、教えてやる」

「ナツキッ!!」

僕はその手を掴み、叫ぶ。

「カイザリオン!!」

『御意』

瞬間、僕たち二人を乗せたカイザリオンと、もう一機の鎧神慨装は、異次元にいた。

「何、ここ!？」

「黙っている、ナツキ!舌をかむぞっ」

しゅんとするナツキ。口を閉じる彼女を見て、僕は目前の敵に集中する。

「申し遅れた。我が名はナイトブレイド。そして、この機体の名は・  
・・」

白い機体。顔は違えど、その造形はカイザリオンに似通っていた。

「『鎧神慨装』アルクオーネ。参る」

一瞬で迫る、敵。腕より、ビームの刃が伸びている。

「ッ!!カイゼルブレード!!」

寸でのところで受け止める。そして、斬り返す。それを難なくかわすアルクオーネ。

「どうした?動きが遅いぞ。そんなものか?」

敵の手に、巻き起こるスパーク。

「ならば、この一撃で消し去ろう。永き螺旋に終止符を打ち、深き絶望を・・・」

迸る波動。次元を破壊せんとする、力。

「ギャザッ シュマガナム・・・!!消え去れええいい!!!!」

まだ、終われない。決めたはずだろう?ナツキを今度こそ守るって。

「ナツキ」

こちらを見る、彼女。混乱していることが、よくわかる。

「守ってやる、だから何も言っな」

「行くぞ、カイザリオン！」

『御意』

『「ギャザツシユカノン！！」』

ぶつかる、二つの力。互いにスパークを奔らせ、空間を歪めていく。  
やだて二つの力はどちらともなく、消滅した。

「フッフ、まだ、終われぬか。だが、覚えておくがいい。貴様に待  
っているのは絶望。死よりも深き絶望よ……。選択の日は近い」

光り輝く、アルクオーネ。

気づけば、僕は元の場所に居た。

「何、今の・・・？」

「わかつたろ？僕に、関わるな」

強い拒絶を込めて言い放つ。彼女の顔を見ずに僕は岐路に着く。い  
や、怖かったのだ。彼女の顔を見るのが。

## 虚無

忘却の世界。そこは、全てが終わってしまっていた。ただ一人を残して。ナイトブレイド。彼にとつて、ここはかつての自分の生まれた世界であつた。そこに郷愁の感情はない。ただ唯一残つた激情が彼を動かす。彼を彼たらしめる所以が。

「何故、取り戻そうとする。世界を、滅ぼしてまで」  
かつて、この世界が滅びを迎えた時、それは言った。

「貴様も、同じ存在ならば、わかるだろう？ あれだけが私をこの世界に繋ぎ止めるものだ、と」  
私はそれを見た。

「だから、貴様は死ななければならない。私のため、何よりも彼女のために」

諦めたようなその顔。

「いいだろう、ここで果てるのも。だが、覚えておくことだ。いつか必ずこの螺旋は終わる、ということを」

「さらばだ、この世界の〇〇〇。願わくば汝の魂に救済があらんことを」

魂の救済などない。私は咎人。貴様に救いが無いように、私にも



また・・・。  
「行くぞ、アルクオーネ」

次元はいくつも存在する。可能性の数だけ、その世界は分岐する。ならば、同じ存在もまた、次元毎に存在する、ということなのだ。本来、交わらぬ定めの世界。その世界を歪めてしまったのは何者なのか。

ヴァーウル。次元破壊者。ナイトブレイド。アルクオーネ。そして、カイザリオン。

世界を越えてくる、存在。永久の螺旋。宿命。どこから、この戦いは始まったのか？

それは誰も知ることはない。知るものが居るとすれば、

それは神なのだろう。

終わらない宿命。逃れられぬ闇。

## 虚無（後書き）

この時点でナイトブレイドが何なのか気付く人も多いと思います。

## 少年と少女

僕は学校に行きなくなかった。昨日の今日で、どんな顔して彼女に会えばいいのか、わからない。僕は臆病者だ。取り敢えず、今日は休もう・・・そう、思う僕にインターホンの音・・・開けるとそこに

彼女が居た。

僕はカイザリオンに乗って逃げたくなった。

何故かこうなった。正座して向かい合う僕とナツキ。座っていて、若干彼女の方が背が高い。男として、この身長はどうなのか、と思う。しかし、そんなことはどうでもいい。

「・・・学校は」

「ああ、今日は休むわ」

・・・

「聞かせてもらうわよ。今日こそは、ね」

「関係ない」

「なくなんて、ないっ!!」

バンッ。

彼女の手が床を叩く音。しかし、僕には彼女がその目から、泪を零していたことに驚いた。

「いつつも、昔っから、そうやって・・・誤魔化して・・・私がどんな思いをしてきたのか、わかる!？」

若干ヒステリックに言う彼女。そんな彼女は愛おしい。自分にこの感情は似つかわしくないと、僕は思った。できれば、気づきたくはなかった。いや、ずっと昔から知っていた。

僕は彼女が好きで、彼女も僕が好きで。そう、それは定められた宿命のように、絡み、結びつく。

「落ち着いて聞いてくれ」

前置き。頷く彼女。

「僕は、君が好きだ」

突然の告白。ずるいようだが、これで誤魔化したい。でも、好きだという感情が、歯止めが利かなくなっただけで。そう、自分で自分を弁解して。

「だから、さ。巻きこみたくは、ないんだ」

口を紡ぐ僕。沈黙。数秒か、数分か、その時間はゆっくりと過ぎていく。永く、そうひどく永く。

やがて口を開く彼女。

「私は廻を、愛している」

けどね、と。

「守ってくれる、んでしょ？」

笑って、僕を見る。そして、ああ、

僕は彼女には敵わないな。

彼女は言う。

「昔っからね」

ホントに。

僕は今までのことを全て話した。幼いころの遭遇した記憶以外全てを。嘘のようなことも、彼女は信じてくれた。日も沈みかけたころ、帰ろうとした彼女は、僕を見る。

「忘れないで、あなたにはいつも、私がいることを」  
目を閉じる、彼女。

「あの時のこと、覚えてる？キスした時の・・・」

一瞬、びくつとする僕。

「・・・うん」

なんとかかそう返す。そうして、彼女が望む行為がわかったから。

その唇にキスをする。

少し、背伸びしたことは僕だけの秘密だ。

こうして僕たちはその日、幼馴染を超えて恋人となった。

けれど。

待ち受ける運命は残酷だった。

## 物語は突然に終局を

僕に待っていたのは、ナツキとの幸せな時間だけではなかった。日に日に敵の侵攻は増えていき、連日のように僕とカイザリオンは戦っていた。今までは一体ずつ倒してきたが、最近は、何体も同時に、違う次元から侵攻しようとしている。そして。

「カイザリオン、ギャザツシユカノンは!？」

『すまないが、これ以上は使えない。我がリアクターが限界だ』

機体性能では遥かに高い鎧神慨装。とはいえ、こちらは一機のみ。対する奴らはまだ十体もいる。

しかも、だ。

奴らは異次元ではなく、会の住む三上崎に居るのだ。街並みを破壊し、燃やさんとする機械の化け物。迫り来る奴らをカイゼルブレードで薙ぎ払う。

「くそ、くつそおおおおお!!」

カイゼルブレードを分離し、それぞれ両手に持ち、目の前の二体を串刺しにする。それでもつて奴らの体を裂いて、その後ろのもう一体を殺す。突如、降り注ぐ、閃光。上空からの攻撃。

「遂に決着の時が近づいてきたようだな、夜剣廻」

アルクオーネと、ナイトブレイドだった。アルクオーネは両腕のカイゼルブレードを起動させると、残っていた、機械どもを切り裂いていった。

「邪魔されてはたまらんからな、クククク・・・」

飛び掛かる、白い鎧神慨装。踊るように、舞うように。両の手より、ビームの刃を振るう。避けようとする、カイザリオンだが、確実に刃は目標を捉えていた、頭部を狙っている。

反射が間に合わない！廻は焦る。ふと、カイザリオンは左腕で庇う。二本の刃は一瞬、受け止められたが、それもすぐに破られた。切断される、左腕。カイザリオン、そして、搭乗者の廻を襲う激痛。

「痛かるう？だが、これからだ。本当の絶望を知ってもらうぞ」  
姿を消すアルクオーネ。痛みに打ちひしがれる、鎧神慨装のもとにすぐに現れる。だが、その手には。

ナツキが握られていた。

「ナツキッ！！」

叫ぶ僕。彼女の口が動く。

た、す、け、て。

「クククハハハ・・・そこで見ていろ、夜剣廻よ。己の無力をなあ！！！」

そして。

握りつぶす、アルクオーネ。飛び散る鮮血。けたたましい、ナイトブレイドの笑い声。

「殺してやる、殺してやるぞっ！！！」

憎しみに駆られた僕がいた。

『モード、ジエノサイド発動』

カイザリオンが言ったモードを知らないが、気にせずに廻は敵に飛び掛かる。高速で振り下ろされる、一本の刃。それはアルクオーネの両腕を切り裂いた。

「そうだ、これだ。ククク、聞いているか、夜剣廻よ。遅かれ速か

れ、彼女は死んでいた」

「死ね、死ねよ…」

「ああ、死んでやろう。だが、言いたいことがある。何故、一体しかいない、鎧神慨装が二体居ると思う？」

答えない廻。なおも続けるナイトブレイド。睨み合う、二機の鎧神慨装。

「鎧神慨装が二体。一つはお前のカイザリオン。そして、私のアルクオーネ・・・いや、カイザリオン」

固まる廻。笑う声が聞こえる。

「数ある世界でカイザリオンを動かせるのは、そう、ひとりだけ。夜剣廻ただひとり。ならば、私はいったいなんだろうなあ？」

導き出される一つの答え。

「そうだ、私も夜剣廻という、存在だ」

衝撃に動けない廻。

「私は彼女を失い、考えた。ヴァーウルの次元統治を行えば、次元は重なり合い、再構築されるのではないかと。私の知る、彼女がな」  
狂う男の声。

「私はだから、仲間を増やそうとした。それはつまり、同位体である、夜剣廻のことだ。だが、どの次元の廻も、途中で死んでいた。だが、貴様は違った」

「私と共に来い。そして、次元を統一し、彼女を、ナツキを…」

「お前ごときが・・・」

冷たい憎悪の声が廻より漏れ出る。

「ナツキの名前を口にするな・・・!!」

変貌のカイザリオン。再生する左腕。黒い走行は白くなっていき、やがて。

二体のアルクオーネがそこにいた。



「殺してやるよ、夜剣廻、!!」  
「来い、夜剣廻・・・」  
再生する、敵の腕。

破壊への序曲はすでに始まっていた。

## 物語は突然に終局を（後書き）

実は「鎧神慨装 カイザリオン」は三部構成の内の第一部です。  
この第一部は取り敢えず、バッドエンドです。

そして・・・

ぶつかり合う刃。燃え盛る街。降り注ぐ、数多の侵略者。今、この世界は終局を迎えていた。

二機の鎧神慨装の戦い。廻と、廻。二つの同存在は戦っていた。歪んだ廻、憎しみの廻。

刃は互いの体を切り裂いた。ただ、憎しみのままに。盲目のままに。

「死ねえ！貴様は、私では無い！！」

「そうだ、お前はナツキを殺した！！お前が・・・！！」  
狂う、異次元の廻。

「違う、違う違う違う違う、チガウ、ち、が、う！！！！き、き、き貴様が殺したア！！貴様の無力がコロシタのだ！！」  
自分自身に言う、異次元の廻。

「もういい。死ねよ。むかつくんだよおお！！」  
血走る目。迫る、異次元の廻。

「断ち切る・・・」  
構える、廻。

斬り落とされる、胴。焼き消された、異次元の廻。静かに立ち、ただ、構えたまま、動かない、廻のアルクオーネ。

戦いが終わった、三上崎は焦土となっていた。廻は街を見た。もう、何もない。帰るべき場所も、守るべき彼女も。

世界は滅亡する。

「俺は、なんなんだろうな・・・」

廻は言った。

「守れなかった、ごめん、ナツキ」

自分のかけていたメガネを外し、落とす。それを踏みつぶす。

「今はまだ、死ねない。君を一人にすることになるけれども・・・」  
決意の表情。

「変えてみせる、この螺旋を・・・運命を・・・」

壊れたメガネ。夜剣廻の象徴は消えゆく世界の空を映す。その空  
は、青い、青い、空だった。

そして・・・（後書き）

次で第一部はラストです。全体的に短い「鎧神慨装」でしたが、プロローグみたいなもので、こんなものです。

## 廻る

夜剣廻には兄がいる。兄、といっても義理の、だが。でも、兄は廻に似ていた。メガネをしていないし、チビでもない。けれど、纏う雰囲気は廻と同じものであった。

兄の名前は夜剣 悠。いい兄だ。僕とナツキ・・・まあ、僕たちは恋人なのだが、僕たちを支えてくれたのは友人、そして、兄だった。

ミステリアスで、何をやっているかはよくわからない。けれど、彼はいい人間だ。僕は彼の弟でよかった。

「廻、飯だつてさ、母さんも父さんも、待っているぞ」

「わかったよ、兄さん」

廻る（めぐ）る世界。一時の平穏の中にある、ごくごく普通の家庭。この先、何が待っているのか。

刻は廻る、次元を超えて。繰り返される、夜剣廻の物語。

空は蒼く澄んでいる。それはどこの世界も同じだった・・・。

廻る（後書き）

取り敢えずの完結。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3252j/>

---

鎧神慨装 カイザリオン

2010年10月9日04時24分発行